

大浦塩田跡は、浜田集落入口の西側、大浦川の河口に広がる湿地帯にあり、種子島で初めて塩田式の製塩が始められたところです。それまでは、浜で海水を焚いて塩を取る方法でしたが、量がたくさん取れないため塩が不足し、何百石という塩を島外より買い入れていました。松寿院はこの塩不足を憂い、塩田開発に取り組みました。

松寿院が安政3年（1856）冬、市来の商人平川某に調査させたところ、ここが塩田に最適であることがわかり、翌年夏、市来の修験者井上良盛坊を招き堤防を築かせ、製塩を始めました。しかし、塩田が狭く生産量が少なかったため、更に経験の深い塩師二人を雇いました。

網代焚きという製塩法により、これまでの10分の1の薪で何倍もの塩を生産することができましたが、松寿院は満足せず、今度は出水から塩師二人を招き、大拡張工事に着手しました。大変な工事で、文久元年（1861）冬にやっと完成しました。

このとき導入した製塩法である防州伝の本釜焚きは、網代焚きよりも数倍多く塩ができ、年間千石（約180.9m<sup>3</sup>）も生産したので、島内はもとより屋久島にも売り出しました。その後、明治27年に塩田拡張のため大規模な埋め立て工事が行われましたが、資金に困り、土地を売り渡してしまいました。しかしその後、平山の有志22名が土地を買取り、さらに官有地の払い下げも受けて、昭和9年、1区画1反8畝（18ha）の広さの区画を23作り、動力ポンプを取り付けた近代的な大塩田を完成させました。塩田で濃縮した海水を4個の釜で焚き、一日に200俵以上の塩が取れ、将来も大いに期待されましたが、終戦後昭和27～28年頃になると塩の輸入が盛んになり、また値段も下がり採算が取れなくなったため中止されました。これにより、種子島における製塩の歴史に幕が降ろされたのです。



塩田跡



昭和9年に作られた沼井（海水を凝縮させたところ）